

天仁元年（1108）浅間山大噴火

●疲弊した上野国●

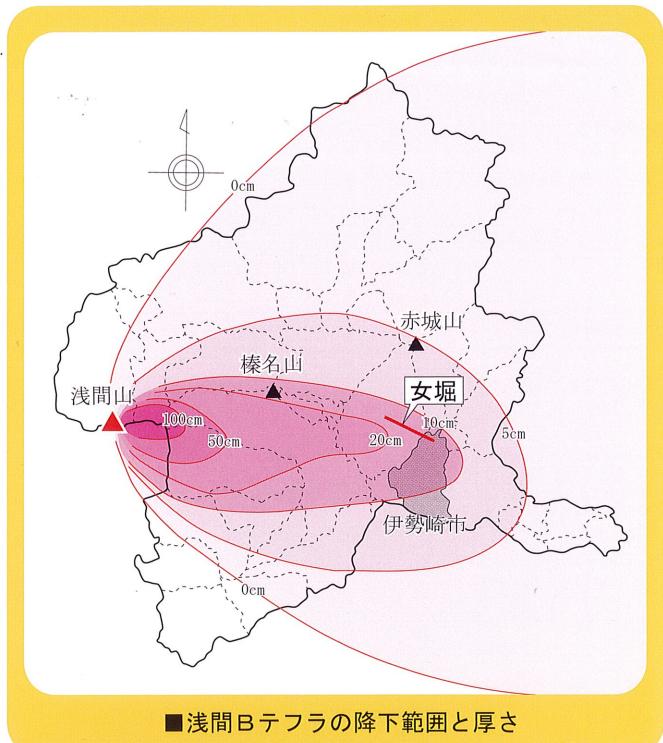
平安時代の末期、こうすけのくに上野国を含む東国では、平将門の乱がおきるなど、律令国家の秩序は乱っていました。また、嘉保2年（1095）に上野国では1か年の税が免除になるほど気候が変動し、上野国は疲弊していました。

●浅間山大噴火●

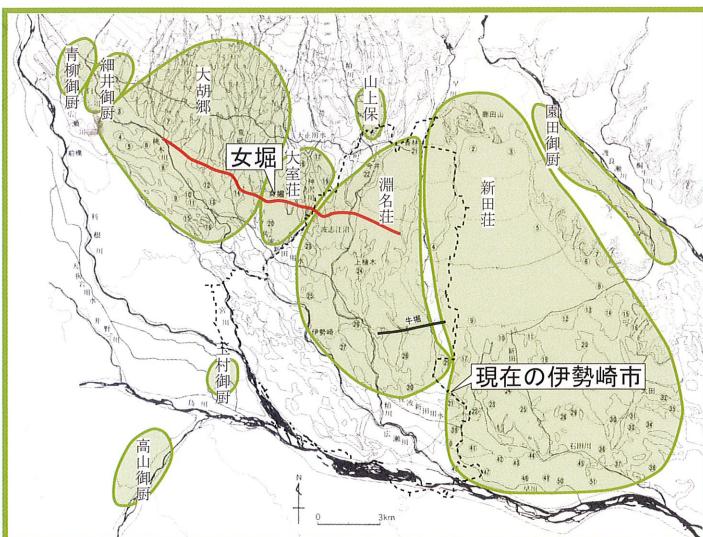
てんにん天仁元年（1108）9月5日（太陽暦）、浅間山が大爆発しました。発掘調査ではこの時の火山灰や軽石（総称して浅間Bテフラ）が平安時代の水田を覆った状態で確認することができ、伊勢崎市では10cm程確認できます。浅間Bテフラで埋没した水田は、そのほとんどが復旧されることなく放棄されており、上野国の荒廃を決定的にしたことがうかがえます。

浅間山大噴火を伝える日記

右大臣藤原宗忠は浅間山噴火のことを日記『中右記』の中で、「砂礫は国中に降り注ぎ……国内の田畠は既に壊滅し、一国の災害としては未だこのようなことは経験したことがない」と記録し、甚大な被害であったことを伝えています。



莊園大開発時代



■赤城山南麓の地形と莊園・御厨・郷

平凡社『よみがえる中世5』を転載・加筆

●淵名荘の成立●

淵名荘は現在の伊勢崎市北側をその範囲とした莊園で、鳥羽上皇の中宮侍賢門院璋子が大治5年（1130）に建立した仁和寺法金剛院の領地（御願寺領）です。いつから淵名荘が成立したのか不明ですが、淵名氏が開発領主となって立荘し、天皇家も関わっていたようです。

●莊園成立ラッシュ●

中央では白河上皇の院政が始まり、社会の動搖は様々な部分に及び中、貴族や武士たちは経済的基盤を求めて庄園や公領の開発に目を向けていきます。浅間山噴火からおよそ半世紀後の12世紀中頃には、全国的に庄園開発が進む大開発時代を迎えて、次々と庄園が成立します。上野国でも浅間山火山灰からの再開発が一つの契機となり、庄園や御厨が次々と立荘されていきます。

莊園（しょうえん）

天皇家、貴族、武士たちによって開発された私的な領地

保（ほ）

国の領地

御厨（みくりや）

神社の領地



■待賢門院璋子 法金剛院葉書より